

## 要旨

本研究は、移動表現におけるベンガル語の類型的特徴について解明を試みるものである。タルミー類型論 (Talmy 1985, 1991, 2000) については、しばしば、様態動詞がさまざまな経路表現と共起する言語 (=様態言語) と、それが不可能な言語 (=経路言語) の類型などとして、その一部を中心的主張として取り上げて議論される (Levin & Rappaport Hovav 1995 他)。本研究では、多様な経路表示を行うベンガル語の母語話者を対象に発話実験を行い、その結果から、ベンガル語が経路主要部外表示型言語でありながら、様態が主要部で表示される割合が非常に低いことを明らかにし、主要部で用いられる動詞の種類は類型とは独立して論じられるべきであることを示す。さらに、主要部で様態動詞が用いられた場合の着点句の使用も限定的であることから、これらの共起制限についても、類型とは独立して扱うべき現象であることを主張する。

## 1. はじめに

移動の諸概念のどの要素が動詞に語彙化されるかで世界の諸言語を分類したタルミー類型論 (Talmy 1985, 1991, 2000) では、英語のように様態を語彙化するタイプ (1a) と、スペイン語のように経路を語彙化するタイプ (1b) が注目され、前者は「付随要素枠付言語」、後者は「動詞枠付言語」として知られている。

- (1) a. *The bottle floated out (of the cave).* (Talmy 1991:488)  
 b. *La botella salió flotand de la cueva.*  
 the bottle exited floating from the cave  
 ‘The bottle exited floating from the cave.’

これらはそれぞれ「様態言語」「経路言語」とも呼ばれる (Wienold 1995 など)。

この議論に照らし合わせると、ベンガル語は (2a) で示すように、「様態言語」とはいえない。この類型論は、複合的なイベントがどのように統合されて表現されるかという観点に基づくものであり、とりわけ重要なのは、文中のどの要素で経路を表現するかであるが、ベンガルで語は (2b) で示すように、英語同様の経路表示を行うことも多い ((2b) では後置詞)。

- (2) a. \**botol-ti guha-r bhitor-e bhaf-l-o'*  
 bottle-CL cave-GEN inside-LOC float-PST-3<sup>2</sup>  
 Lit. ‘The bottle floated into the cave.’  
 b. *botol-ti bhaf-te~bhaf-te guha-r bhitor-e gae-l-o*  
 bottle-CL float-IP~float-IP cave-GEN inside-LOC go-PST-3  
 ‘The bottle went into the cave by floating.’

そこで本研究では、多様な経路表示を行うベンガル語の移動表現の全体像を明らかにした上で、タルミー類型論を再考する。なお、タルミーの言う「動詞」とは主動詞、すなわち文の主要部であることなどを踏まえて、Matsumoto (2003 [2011]) は「経路主要部外表示型言語」 (=経路を主要部以外の要素で表す言語) と「経路主要部表示型言語」 (=経路を主要部で表す言語) としての類型の再定式化を提唱しており、本研究もこれに従う。

## 2. 問題の所在

## 2.1 ベンガル語の移動表現

ベンガル語の移動表現に関わる要素には、動詞、副詞、後置詞、名詞、位置名詞などがある。経路は主要部でも後置詞句や位置名詞の所格形といった主要部外要素でも表すことができる。(3a) は主要部で、(3b) は位置名詞の所格形で経路が表される例である。

<sup>1</sup> 本発表の例文では、経路を表す要素を太字で、主要部を実線下線で示す。

<sup>2</sup> 本発表で使用する略号は以下の通りである。1: 1<sup>st</sup> person, 3: 3<sup>rd</sup> person, CL: classifier, GEN: genitive, IP: imperfect participle, LOC: locative, PP: perfect participle, PROG: progressive, PR.PERF: present perfect, PST: past tense, SG: singular, VN: verbal noun

- (3) a. *amar bondhu dour-e ghor-e dhuk-l-o*  
 1SG.GEN friend run-PP room-LOC enter-PST-3  
 ‘My friend entered the room by running.’
- b. *amar bondhu dour-e ghor-er bhitor-e gae-l-o*  
 1SG.GEN friend run-PP room-GEN inside-LOC go-PST-3  
 ‘My friend went into the room by running.’

ベンガル語は様態動詞も豊富で、様態は主要部で表すこともできるが、日本語の「～て」や「～ながら」に相当する従属節<sup>3</sup>や複雑述語の前項 (=準主要部<sup>4</sup>) で表されることが多い。(4a) は従属節の例、(4b) は準主要部で様態が表される例である。

- (4) a. *amar bondhu het-e~het-e saikel-er dik-e gae-l-o*  
 1SG.GEN friend walk-PP~walk-PP bicycle-GEN direction-LOC go-PST-3  
 ‘My friend went toward the bicycle by walking.’
- b. *amar bondhu baf-a-r jayga-te het-e gae-l-o*  
 1SG.GEN friend sit-VN-GEN place-LOC walk-PP go-PST-3  
 ‘My friend went walking to the sitting place.’

また、ベンガル語はダイクシス表現が非常に豊かである。まずはダイクシス動詞 *af-* (come) と *ja-* (go) が主動詞として用いられる。(5a) のように単独で現れることもあれば、(5b) のように複雑述語の後項として現れることもあるが、いずれの場合も主要部である。

- (5) a. *amar bondhu ghor-e {af-ch-e/ ja-cch-e}*  
 1SG.GEN friend room-LOC come-PROG-3 go-PROG-3  
 ‘My friend is {coming/ going} to the room.’
- b. *amar bondhu ghor-e dour-e {af-ch-e/ ja-cch-e}*  
 1SG.GEN friend room-LOC run-PP come-PROG-3 go-PROG-3  
 ‘My friend {came/ went} running to the room.’

ほかにも *amar dik-e* (1SG.GEN direction-LOC) ‘toward me」、*amar kach-e* (1SG.GEN near-LOC) ‘near to me」のように1人称代名詞をともなった後置詞句や、*ekhane* (to.here) ‘to here」、*okhane* (to.there) ‘to there」のような表現がダイクシス表現として挙げられる。(6) で示すように、1つの節に複数のダイクシス表現が共起することも可能である。

- (6) a. *amar bondhu amar {dik-e/ kach-e} dour-e af-ch-e*  
 1SG.GEN friend 1SG.GEN direction-LOC near-LOC run-PP come-PROG-3  
 ‘My friend came running toward/ to me.’
- b. *amar bondhu ekhane dour-e af-ch-e*  
 1SG.GEN friend to.here run-PP come-PROG-3  
 ‘My friend came running here.’

## 2.2 研究課題

タルミー類型論は、Matsumoto (2003 [2011]) が指摘するように、その一部を中心的主張として取り上げて、本質とは異なる側面を捉えて議論されることがある。1つは、特定の移動動詞語彙の豊富さに関する議論である (Wienold 1995)。ここでは、様態言語とは様態動詞が豊富な言語、経路言語とは経路動詞が豊富な言語とされる。もう1つは、様態言語とは様態動詞がさまざまな経路表現と共起する言語、経路言語とはそれが不可能な言語であるとする議論である (Levin & Rappaport Hovav 1995 など)。これは Talmy (2000) で、スペイン語のような言語は (7) のように様態を動詞で、着点を前置詞句で示すことはできないという指摘されたことなどから、Talmy 類型論を様態動詞の性質の差異に関するものだと解釈したものである。

<sup>3</sup> 様態を表す従属節には 1) 完了分詞形 (例: *het-e* (walk-PP))、2) 完了分詞の重複形 (例: *het-e~het-e* (walk-PP~walk-PP))、3) 未完了分詞の重複形 (例: *hat-te~hat-te* (walk-IP~walk-IP)) の3種類の形態が可能である。

<sup>4</sup> 本発表の例文では、準主要部を点線下線で示す。

- (7) \**La botella flotó a la cueva.*  
 the bottle floated to the cave  
 Lit. ‘The bottle floated (in)to the cave.’

しかし、Talmy 類型論はあくまでも、経路を文のどの要素で表すか（主要部か、主要部以外か）に基づくものであり、様態動詞が幅広い経路表現と共起できるかどうかは別に扱われるべき問題である。この点に関して、Narasimhan (2003) は、ヒンディー語について、英語と同等に豊富な様態動詞を有するが、経路表示の方法が極めて限定的であり、この点ではスペイン語などと同じ類型的特徴が見られることを指摘し、移動表現を語彙ではなく、構文で捉えるべきであることを論じている。

さらに、先行研究で、経路言語（=経路主要部表示型言語）では様態動詞が着点句と共起しない傾向があることが指摘されている（Aske 1989, Levin & Rappaport Hovav 1995 など）が、松本 (2017) は複数の言語の観察から、経路主要部表示型であることと、様態動詞が着点句と共起しないことは必ずしも一致しないと結論づけている。

そこで、本発表では、ヒンディー語と同系統に属するベンガル語の母語話者を対象に言語産出調査を行い、1) ベンガル語の類型的特徴明らかにした上で、経路の表出方法に制限はあるか、あるとすればどのような制限があるのか、2) 様態動詞と着点句に共起制限はあるか、あるとすればどのような制限があるのか、を研究課題とし考察を行う。

### 3. 調査の方法

本研究では、国立国語研究所のMEDAL プロジェクト (NINJAL Project on Motion Event Descriptions across Languages) で作成されたさまざまな移動事象のビデオ映像を用いて、オンラインで発話実験を行った<sup>5</sup>。ビデオ映像は合計 52 クリップがあるが、本発表で報告するのは自立移動事象の 27 クリップ分（3 種類の経路: TO, TO.IN, UP, 3 種類の様態: WALK, RUN, SKIP, 3 種類のダイクシス: 話者方向、話者から離れる方向、そのどちらでもない方向への移動の組み合わせ）である。実験参加者はバングラデシュ出身のベンガル語母語話者 15 名（男性 11 名、女性 4 名、平均年齢 27.1 歳）であった。

実験者がビデオ映像を提示し、実験参加者に口頭で描写してもらい、書き起こしを行った。その後、文構造、各言語形式の表す概念、言語形式の種類、文中での機能などについてコーディングを行い、集計し、初期分析を行った。なお、ダイクシスについては、TO.IN や UP などとは異なる性質であるため、これら経路とは分けて分析した。分析の方法を (8) に示す。

- (8) *amar bondhu dour-e firī diye upore uth-e af-l-o*  
 1SG.GEN friend run-PP stairs by upwards climb-PP come-PST-3  
 ‘My friend came up the stairs by running.’

言語表現	意味	意味細分類	形式	形式再分類	機能
<i>amar bondhu</i>	Figure	person	名詞句		主語
<i>dour-e</i>	Manner	RUN	従属節	完了分詞形	主要部
<i>firī</i>	Ground	route	名詞句		斜格語
<i>diye</i>	Path	VIA	後置詞		名詞関連要素
<i>upore</i>	Path	UP	副詞		動詞関連要素
<i>uth-e</i>	Path	UP	動詞	完了分詞形	準主要部
<i>af-l-o</i>	Deixis	hither	動詞	過去形	主要部

(8) では、様態が従属節の主要部で、経路が動詞関連要素と準主要部の 2 か所で、ダイクシスが主要部で表されていることがわかる。

## 4. 結果と考察

### 4.1 類型的特徴

#### 4.1.1 経路表示と経路の表出方法

図 1, 2 で示すように、経路が主要部および準主要部（複雑述語の前項）で表示された合計の割合は 24.2%（主要部 13.8%、準主要部 10.4%）で、経路が主要部外で表示された割合は 85.9%であった。これらの結果は、ベンガル語が経路主要部外表示型言語であることを示している。

<sup>5</sup> 第 2 著者である石川さくらが実験を、第 1 著者である江口清子がコーディングを担当した。

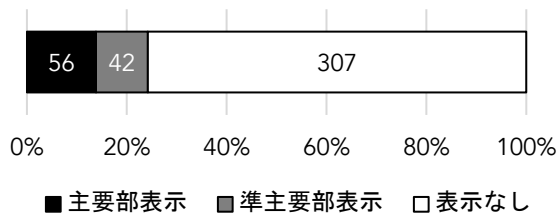


図 1. 主要部／準主要部における経路表示率

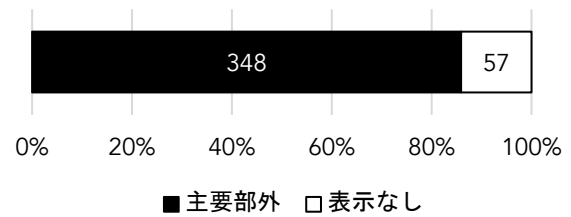


図 2. 主要部外要素における経路表示率

さらに経路表出についてより詳しく見てみると、図 3 で示すように、その表示率や表現位置は経路場面ごとに異なることがわかった。

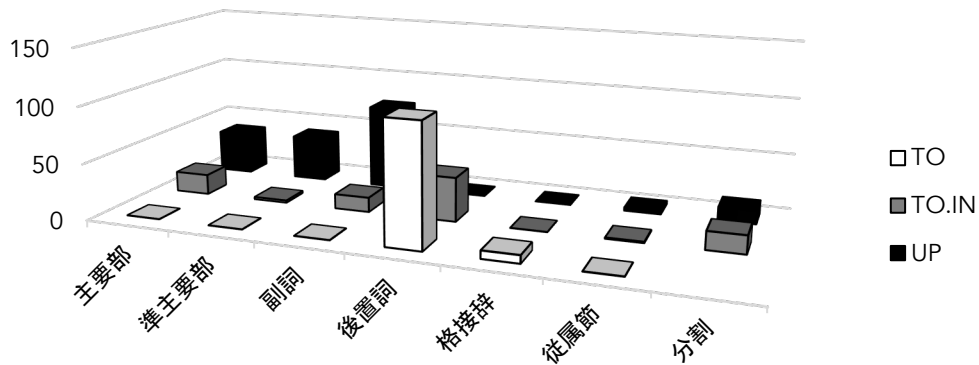


図 3. 場面別経路表現位置

TO は、経路表示が行われた 100%が、(9) で示すような主要部外での表示であり、1 例のみが 2 重表示（後置詞＋格接辞）で、残りは単独表示（後置詞 106 例、格接辞 6 例）であった。TO.IN は (10a) で示すような単独表示が 37 例（うち主要部／準主要部は 7 例）、(10b) で示すような 2 重表示が 26 例（うち主要部／準主要部を含むものは 13 例）であった。

(9) *amar bondhu douṛ-e saikel-er kach-e gæ-l-o* /Run×To×AwyFrmS/  
 1SG.GEN friend run-PP bicycle-GEN near-LOC go-PST-3  
 ‘My friend went toward the bicycle by running.’

(10) a. *amar bondhu douṛ-e bɔf-a-r jayga-ṭi-r bhitor-e gi-ech-e* /Run×To.In×AwyFrmS/  
 1SG.GEN friend run-PP sit-VN-GEN place-CL-GEN inside-LOC go-PR.PERF-3  
 ‘My friend went into the sitting place by running.’

b. *amar bondhu douṛ-e bɔf-a-r jayga-r bheter-e dhuk-l-o* /Run×To.In×AwyFrmS/  
 1SG.GEN friend run-PP sit-VN-GEN place-GEN inside-LOC enter-PST-3  
 ‘My friend entered (into) the sitting place by running.’

UP は (11a) で示すような単独表示は 34 例（うち主要部／準主要部は 15 例）にとどまり、(11b) で示すような 2 重表示が 64 例（うち主要部／準主要部を含むものは 61 例）のほか、3 重表示も 2 例観察された。

(11) a. *amar bondhu nac-te~nac-te firi beye upore a-l-o* /Skp×Up×TwdS/  
 1SG.GEN friend dance-IP~dance-IP stairs along upwards come-PST-3  
 ‘My friend came up along the stairs by dancing.’

b. *amar bondhu douṛ-e firi beye upore uth-l-o* /Run×Up×AwyFrmS/  
 1SG.GEN friend run-PP stairs along upwards climb-PST-3  
 ‘My friend climbed up along the stairs by running.’

なお、主要部外表示型言語でありながら UP を主要部で表示する傾向はロシア語と共通する (Łozińska & Pietrewicz 2018)。

#### 4.1.2 ダイクシスの表出方法

ダイクシスとの関わりでは、図 4 で示すように、主要部でダイクシスが表出された割合が 77.8%と非常に高く、ダイクシスに関しては主要部表示型であるといえる。この特徴はネワール語と共通する(松瀬 2017)。

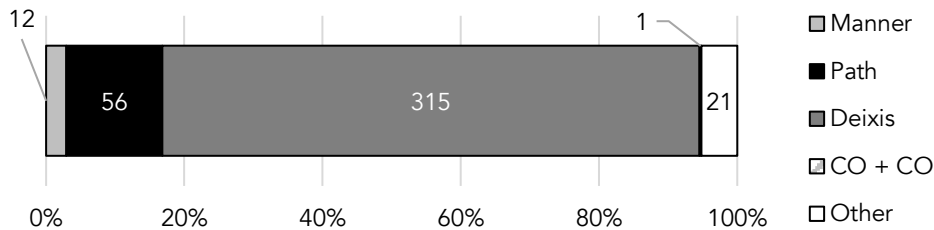


図 4. 主要部で表現される概念

2.1 節で述べたとおり、ダイクシスの表出方法には 3 通り(動詞、1 人称代名詞をともなった後置詞句、副詞)が存在するが、今回の調査ではこの 3 種類のダイクシス表現が同一節内に現れる回答は観察されなかった。2 重表示が観察されたのはおもに /TwdS/ 場面(103 例中 98 例)であり、その場合は(12a)のような、主要部と 1 人称代名詞をともなった後置詞句の組み合わせであった。単独表示はすべて(12b)のような、主要部のみによる表示であった。

- (12) a. *amar bondhu dour-e amar kach-e af-l-o* /Run×To.In×TwdS/  
 1SG.GEN friend run-PP 1SG.GEN near-LOC come-PST-3  
 ‘My friend came to me by running.’  
 b. *amar bondhu dour-e bɔf-a-r jayga-r dik-e gae-l-o* /Run×To.In×AwyFrmS/  
 1SG.GEN friend run-PP sit-VN-GEN place-GEN direction-LOC go-PST-3  
 ‘My friend went towards the sitting place by running.’

この言語でさらに興味深いのは、ダイクシスが表出された場合に、(13)のように、経路が主要部で表示された割合が 14.4% (すべて準主要部) であるのに対し、ダイクシスが表出されない場合には 1 例を除いてすべての回答において(10b), (11b)のように、経路が主要部で表示されたという事実である。

- (13) *amar bondhu lafa-te~lafate fiiri beye upore uŋh-e af-ch-e*  
 1SG.GEN friend jump-IP~jump-IP stairs along upwards climb-PP come-PROG-3  
 ‘My friend came climbing up along the stairs by jumping.’

#### 4.1.3 様態の表出方法

様態は、(9)–(13) で見られるように、もっとも多く回答において従属節で表現された(215 例: 53.1%) が、表出されない回答も多く見られた(150 例: 37.0%)。様態が主要部で表示された回答は、(14a) のように主要部で表示されたものはわずか 12 例(3.0%)で、(14b) のように準主要部で表示されたものは 17 例(4.2%)であった。

- (14) a. *ek-jon khub shobdo-kor-e दौरa-l-o* /Run×To.In×Neu/  
 one-CL very sound-do-PP run-PST-3  
 ‘One person ran with a sound.’  
 b. *amar bondhu amar dik-e dour-e af-l-o* /Run×To.In×TwdS/  
 1SG.GEN friend 1SG.GEN direction-LOC run-PP come-PST-3  
 ‘My friend came running towards me.’

追加で行った母語話者への聞き取り調査からも様態動詞を主要部とする文は容認度がかなり低いことがわかった。つまり、主要部外表示型言語であるということと、主要部で様態動詞を用いるということは独立して考えるべきである証拠が提示されたことになる。

#### 4.2 様態動詞との着点句の共起制限

以上のように、ベンガル語は経路主要部外表示型言語でありながら、本調査では、様態動詞を主要部とする文はほとんど観察されなかった。これは、本調査で用いた映像がいずれも着点を含むものであり、それを描写することを要求されたことと関わりがある、つまり、経路を表出するためには、様態動詞を主要部とす

る文は適さないのだと考えられる。実際に単独の主動詞として様態が表出された回答を見てみると、(14a) のように、着点句をともなうものは皆無であり、(14b) のように、ダイクシス動詞が現れた場合にのみ、着点句が共起可能となる。したがって、ベンガル語では、スペイン語や日本語などと同様に、主要部の様態動詞が着点句と共起しないといえる。

これは、ベンガル語で着点を表す所格接辞 *-e* が位置も表すことができる多義的マーカーであるためだと考察される。つまり、様態動詞単独では所格名詞句を着点として解釈することができないからである。これについて松本 (2017) は、「本来的に着点句ではない」句が着点を表す用法を持つ場合に、その句は様態動詞と共起しにくいという一般化を提唱しており、本調査で得られた結果はこの一般化に合致する。

## 5. まとめ

本発表では、実験調査によって得られたデータに基づき、ベンガル語は経路主要部外表示型（ダイクシスに関しては主要部表示型）言語であることを明らかにした。しかし、従来、経路主要部外表示型として知られる英語などの言語とは異なり、主要部では様態動詞は用いられないことも同時に確認した。これらの結果から、経路をどこで表すかというタルミー類型論の本質と、主要部で経路動詞あるいは様態動詞が用いられるかということは、それぞれ独立して論じられるべき事実であることを示した。

さらに、様態動詞と着点句の共起について考察し、本来的に着点句ではない句が着点を表す用法を持つ場合に、その句は様態動詞と共起しにくいという松本 (2017) の一般化に沿う結果を提示し、先行研究で論じられてきたような、類型の差異によるものではないことを示した。

今後、Narasimhan (2003) で考察されたヒンディー語に関しても、本研究と同様の調査により検証することが望まれる。

## 参考文献

- Aske, Jon (1989) Path predicates in English and Spanish: A closer look. *BLS* 15: 1—14.
- Levin, Beth, and Malka Rappaport-Hovav (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Łozińska, Joanna & Barbara Pietrewicz. (2018) Lexicalisation of vertical motion: A study of three satellite-framed languages. *Études cognitives [Cognitive Studies]* 18. 1—13.
- 松瀬育子 (2017) 「ネワール語の移動表現」松本曜 (編) 『移動表現の類型論』65—94. 東京: くろしお出版.
- 松本曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」中右実 (編) 『日英語比較選書 6 空間と移動の表現』125—230. 東京: 研究社出版.
- Matsumoto, Yo (2003) Typologies of lexicalization patterns and event integration: Clarifications and reformulations. In Shuji Chiba et al. (eds.) *Empirical and theoretical investigations into language: A festschrift for Masaru Kajita*, 403—418. Tokyo: Kaitakusha. [Reprinted in Adele Goldberg (ed.), *Cognitive linguistics (Critical concepts in linguistics)*, Vol. III, 422—439. London: Routledge. 2011.]
- 松本曜 (2017) 「移動表現の性質とその類型性」松本曜 (編) 『移動表現の類型論』337—353. 東京: くろしお出版.
- Narasimhan, Bhuvana (2003) Motion events and the lexicon: a case study of Hindi. *Lingua* 113 (2): 123—160.
- Talmy, Leonard (1985) Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In: Timothy Shopen (ed.) *Language typology and syntactic description, Volume 3: Grammatical categories and the lexicon*, 57—149, Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard (1991) Path to realization. In: *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 17, 480—519.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a cognitive semantics, Volume 1: Concept structuring systems*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Wienold, Götz (1995) Lexical and conceptual structures in expressions for movement and space: with reference to Japanese, Korean, Thai, and Indonesian as compared to English and German. In Urs Egli, Peter E. Pause, Christoph Schwarze, Armin von Stechow, and Götz Wienold (eds.) *Lexical knowledge in the organization of language*, 301—340. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.